
わんわんお！

スタジオぽこたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わんわんお！

【Nコード】

N8324X

【作者名】

スタジオぼこたん

【あらすじ】

レキィサ・ダブルファング。双牙の称号を持つ少年は、とある使命を帯びて、とある都市を訪れていた。そこはかつてイリスの聖地と呼ばれ500年前の神魔戦争では決戦地として使用された場所。現在は人類の希望の星『アルビレオ』と呼ばれていた。少年はその都市で一人の少女と出会う。これは一つの約束と500年越しの思い。そして騎士道に殉ずる乙女達の物語。

序章

樹齡千年を超える大樹がひしめく暗い森の中を、一人の少年が走る。

呼吸は乱れ、全身にひどい汗をかいていた。

心臓は高鳴り、喉は渴き、指先は震えた。

それは絶望的な死だった。

木々の間を縫うように走り、走り、走り

「ッ！！」

少年が咄嗟に頭を下げた。さっきまで頭をあつた空間を鋭い牙が喰らいつく。歯と歯が噛み合わさるにしては、ゾツとするような金属音を響かせ、周囲には火花が散った。

少年に噛み付こうとしたのは、見上げるほどに巨大な狼だった。

暗い森の中なのに、その漆黒の毛並みは、まるで光を発しているかのように、絶大な存在感を放っていた。

巨大な四肢に、巨大な胴、鋭い牙が並ぶ大きな口は、少年の体を一飲みに来るそうなほどであった。

「くッ」

紙一重で死を避けた少年は、避けた動作の反動で危うく転びそうになったが、その流れに逆らわず前へと跳んだ。

地面に片手をつきながら前転し、全身でしなやかに衝撃を吸収しながら、再び走り出そうとした。

巨大な狼は、そうはさせじと太い前足で、前方を薙ぎ払う。

少年は向かって左の大樹を強く蹴り、三角跳びの要領で今度は右へと大きく跳んだ。

鋭い爪が少年を掠めながら大樹に激突した。大樹は粉々に爆散し、木片が鋭い矢のように飛び散る。少年は腕で顔を庇いながら、転がるように走る。

先ほどから何度も何度も、後一步の所で獲物を取り逃がしていた狼は、怒りに満ちた咆哮を上げながら少年を追った。

「はあ、はあ、はあ」

少年は大きな獣道を逸れると、細い獣道へと飛び込んだ。

そこは大きな大樹に挟まれた非常に小さな獣道で、あきらかに巨狼が通れるサイズでは無かった。

だが、怒りに狂った巨狼は、立ち塞がる木々の全てを薙ぎ払い、少年を追いかける。

少年は腰に大型のナイフを帯びていた。

だが今のこの状況では、天地がひっくり返っても、この狼には勝てはしない。少年はそれを良く理解していたし、狼もそれを良く理解していた。

この『太古の森』と呼ばれる場所では、人間は捕食される側なのだ。

少年は走る。

やがて、開けた広い空間に出た。

巨大な大樹で囲まれ深い海の底のように日の光が届かない暗闇の森で、そこだけは優しい日の光が差していた。

美しい花が咲き乱れる花畑。まるで場違いな光景。

だがそこは、逃げ場の無い袋小路、逃避行の終わり、袋の鼠であった。

濃厚な死の気配、獰猛な獣の息遣いが、すぐ背後にまで迫って

序章（後書き）

はじめましての人は、はじめまして。お久しぶりの人は、お久しぶりです。
スタジオぽこたんです。

第1章 一目惚れ

1

出会いはいつも唐突だ。

夜の闇を切り裂くように刃がきらめく。それは目にも留まらぬ早業だった。

冷たい刃の感触が己の首筋に存在するのを、少年は文字通り肌で感じていた。

少年の名は『レキ』、15歳程度の背丈で、まるで少女のようにあどけない顔立ちに、猫毛ぎみの黒髪。旅人が良く使用するこげ茶色の外套に黒いブーツ。一見すると何処にでも居る冒険者風の格好をした少年は、今まさに生命の危機を迎えていた。

「動かないで下さい。少しでもおかしなマネをすれば首が飛びますよ」

鋭い刃を、レキの首筋に押し付ける女性は、殺気に満ちた声ですう言った。

レキはとある都市の、とある暗く薄汚れた裏路地に居た。何故こんな場所に居るのか。は、道に迷ったからである。

既に日が落ち、辺りは真っ暗だ。特に街灯の無い裏路地であるこの場所は、まるで夜の海のように漆黒の闇に包まれている。

だというのに、首筋に当てられた刃だけが、鈍い光を放つ。

「……………」

対する少年レキは、咄嗟の事態に反射的にナイフを抜きかけ動きを止めた。半ば以上まで鞘から抜かれたナイフを持つ少年の手には、じつとりと汗が滲む。それはまぎれも無い『恐怖』あと数ミリでもナイフを引き抜けば、即座に死ぬ。その確信にレキの体は麻痺したように動けなくなる。胸の鼓動が高まり、息が苦しい。な

のに

「武器を捨てなさい」

それは、透き通った天使のような美声。呼吸すら躊躇われる緊迫した状況だというのに、レキはその声に聞き惚れていた。

そして胸の鼓動が、恐怖によるものでは無い事に戸惑う。

「……警告はこれで最後です。武器を捨てなさい」

首筋に押し当てられた刃に力が籠められた。首筋に鋭い痛みが走り、ほんの少し血が溢れる。流れ出た血は、首先に押し当てられた刃に赤いラインを描きながら地面へと落下し、地面へ鮮やかな血痕を刻む。

「……………」

レキはナイフを完全に引き抜くと、ゆっくりと手を開いた。物理法則に従い甲高い金属音を響かせて、地面へと突き刺さるナイフ。

武器を捨てた事で、女性が小さく息を吐いた。ただのそれだけなのに、レキの心臓は五月蠅い位に鼓動した。

「私の質問に素直に答えれば、これ以上の危害は加えません。誰に

……………雇われましたか？」

「や、雇われた……………」

「……………惚けても無駄です。たいした手並みでしたが……………爪が甘いようですね？」

「えっと……………ボクはただ、道を尋ねようと声をかけたただけなんだけど……………」

レキは、乾く喉に無理やり唾を飲み込むと、何とか言葉を紡いだ。

「……………」

気まずい沈黙が辺りを支配する。

「ほ、本当ですか？ ウソを付くと為になりませんか？」

「嘘じゃない、本当だよ！」

「では、貴方は何者です？ この私の背後をいとも容易く取るなん

て、普通じゃありえま」

その瞬間、

女性が言葉をつむぐよりも早く、レキは腰に手を回すともう一本のナイフを引き抜いた。

少年の突然の凶行に女性は冷静に刃を、手に持つ『槍』を振るう。レキは構わずにナイフを投擲した。それは目にも留まらぬ早業だった。

レキが投擲したナイフは、女性を僅かに掠めると、そのまま裏路地の奥へと消え去る。

掠めたナイフによって切断された女性の数本の髪が、暗闇の中に黄金色の粒子を放ちながら宙を舞う。そんな光の粒子を切り裂くように、大上段から振り下ろされたのは、女性が振るった槍の一撃。容赦も呵責も無い、神の鉄槌が如き一撃は、尋常ならざる風の塊となり、轟音と共にその場に居る『者』全てを薙ぎ払った。

たった一人を除いて

「手荒な真似をした事、まずお詫びします。私の早合点でした。どうかお許してください」

まるで爆心地のような惨状。その中心に立つ女性は、自らの腕の中に一人の少年を、レキを抱きかかえていた。

長大で重量級の槍を片手でささえる女性はレキを守るように、油断無く槍を構える。

そして、

「闇に潜み人命を狙う悪しき者よ。最早お前が敵う相手では無いと知りなさい。それでも尚、黒き刃を振るうのならば、戦乙女の名にかけて 覆滅します」

それは、とても静かな声だった。

だが、その声に秘められたるは絶大なる殺気。大気が震えるほどの圧倒的な殺しの圧力を受けた影に潜む者は、何も語らずただ静かにその場から姿を消そうとした。

「待ちなさい。それは……返してもらいましょう」

影に潜む者は、気配を消すその刹那、殺気を籠めて何かを放つ。それはレキが投擲したあのナイフだった。暗闇の中を高速で飛来したナイフを、女性は二本の指で白羽取りしてみせる。恐るべき業の冴えであった。

女性の活躍により、襲撃者は去り、脅威は無くなった。

だがレキは、とんでもない強敵に遭遇していた。首筋に刃を押し付けられてる先ほどよりも、よほど危険なこの状況に、レキは為すべが見つかからない。

少年の眼前、視界の全てを多い尽くすのは、暖かくて、ふわふわして、ムニムニして、指が食い込むほど柔らかくて、手では掴みきれないほど大きくて、とても甘く良い匂いがして、先端が少しコリコリっして、そんな凄まじい『兵器』が左右に合計二門つも備え付けられている。現在レキは、その深き谷間において、挟撃……挟み撃ちという全滅の危険を孕んだ圧倒的窮地に陥っていた。

「むー、むむー！　むー！」

つまり圧倒的肉壁、詳しくは言えないが世界最高峰の『おっぱい』に挟まれた少年は、羞恥と、興奮と、色んな要因が重なり　窒息寸前だった。

重量級の槍を片手でささえる程の膂力で、ムギューと胸の谷間に顔を押し付けられたレキは、溺れる者は藁でも掴むと言わんばかりに、女性の胸を揉みしだき、掻き分けて

「ぷはあ！」

死と隣り合わせの桃源郷から、なんとか生還を果たした。

そして、羞恥と興奮と、己の『身体的』な要因から、逃げるように女性から体を離そうともがく。

だが、

「そ、そんなに……動かないで下さい」

それは、最初と良く似た言葉。

だが耳元で囁かれた女性の声は、最初の殺気だった声とは正反対の、とても可憐で優しい声。同時に女性の声には、確かな熱が籠められていて、見えずともその顔が赤面しているのが想像できた。

「ご、ごめんなさい！」

レキは、つい先ほどまで柔らかな白いお餅を、指で『ぶにぶに』していた。それは谷間から抜け出そうとする脱出行為であったが『ぶにぶに』していた事実は変わらない。それはもう念入りに『ぶにぶに』して、たまに『コリコリ』までしてしまった。

「……………い、いえ……………それよりも」

ふと、首筋に何か柔らかい感触が触れた。それは暗闇の中でもわかるほど、純白のハンカチだった。

血がみるみる染みこんで行き、白い領域が黒く穢されていく。

そういえば、槍に刃先で首を少し切った事を、レキは今更ながらに思い出した。

しかも傷口からは、結構な血が溢れ出ている。

「本当に、んッ……………ごめんなさい……………」

女性は、少しだけ甘い吐息が混じった、妙に色っぽい声を出す。

「う、ううん、気にしないで……………」

だ、だって興奮して、出血量が上がっただけだし。

まさに鼻血と同じであった。

そんなレキの胸中とは裏腹に、気道を押さえない絶妙な力加減で的確な止血をする女性、そのハンカチを持つ女性の手は、今も微妙かに震えていた。

「あ、あの……………本当に大丈夫だから」

レキは暗がりでも互いに顔も見えない中、目の前の女性を見つめた。暗闇の中、必死で相手の瞳を探る。そして、確かに目が合うのを、視線が絡み合うのを感じた。女性もまた、こちらの瞳を捜していたのだ。

ドクン

それは果たしてどちらの鼓動の音だったのだろうか？

女性の胸に抱かれた状態のレキには、それが判らなかつた。ただハッキリとしているのは、自らの心臓の鼓動が、痛いほどに早くなっている事。それだけは間違いようが無かつた。

これが二人の出会い。

舞台となつたのは、淀んだ空気と、血の匂いが漂う真つ暗な裏路地。道を尋ねようと声をかけたら危うく殺されかけた。

少年の不注意と、少女の勘違いが生んだ、それはある種劇的で、これっぽっちも感動的で無く、ロマンスの欠片も見当たらない出会い。そのはずだつた。

だが二人は、顔も見えないこの状況で、不思議と相手に強く惹かれるものを感じていた。そんな二人を祝福するかのように、分厚い雲の切れ目から、優しい月の光がさした。夜の帳が打ち払われ、二人の姿をくつきりと照らし出す。

2節

2

「えッ」「あッ」

闇が抜われ、二人は初めて互いの顔を確認した。

呼吸は乱れ、全身に汗をかいていた。心臓は高鳴り、喉は渴き、指先は震えた。

それは一目惚れだった。一目見た瞬間から、恋に落ちていた。

それは目を見張るほどの美少女で、歳の頃は16歳程度。手足を覆う白銀の部分甲冑と、青い戦乙女の戦装束が印象的だ。

黄金色に輝く美しい髪に、青い宝石のように綺麗な瞳。美の女神でも嫉妬するほど整った目鼻立ちで、濡れたように艶やかな桃色の唇が、少女の美貌に強烈な色香を加えていた。

そして、視線を下げるとそこに飛び込んできたのは、犯罪的に突き出た大きな胸。年齢には不釣り合いなほど豊かに成長した胸の膨らみは、見事なまでの胸の谷間を作り出し、それが惜しげもなく晒されている。ただ見ているだけなのに、深い谷間に吸い込まれそうな圧倒的な迫力と吸引力を放っていた。

え！？こ、こんな凄いのをボク……！？

レキは思わず鼻を押さえた。

これ以上は危険だと思い、逃げるように視線を下げる。

だがそこに広がるのは、折れそうに細い腰から連なる魅惑のヒップライン。それを覆うのは驚くほど短い、超ミニ丈のプリーツスカート。見えそうで見えない超ミニスカと艶めかしい太ももで構成された禁断の三角地帯。絶対領域がそこには存在した。

更にふともも自体も一級の工芸品のように見事で、うっとりする

ような脚線美に、しなやかな筋肉、なのに女性的な肉感は一切失われていない。月明かりに照らされて白く輝く美肌がとても扇情的にうつつた。

と、都会って凄いよ！

信じられないほどの美貌と、抜群のプロポーション。そして計り知れない色香を放つ美少女は、こちらの舐め回すような視線を受け、恥ずかしそうに身をくねらせる。太ももは擦りあわせられ、胸は上下左右に揺れうごめいた。その絶大な破壊力に、レキはうめき声を上げる。

「そ、そんなに見つめられると……こ、困ります」
少女は恥らうように目を伏せる。

「ご、ごめんなさい！ ボク」
言葉が続かない。喉がカラカラに渴いていた。
そして、

「あ、あの」
二人同時に口を開き、二人同時に撃沈した。二人揃って真っ赤な顔になる。

だが、何を聞きたいかは不思議と互いに理解出来た。この少女が何を聞きたいのか何故だか理解できた。

「ボ、ボクは……レキって言います」

「わ、私の名は……ニフィルシス。どうかニースとお呼び下さい」
頭の中で何度も少女の名前をリフレインさせる。

「ニース……さん」「レキ……君」
お互いの名前を、噛み締めるように呟き、見つめあう。心臓の音が痛い位に響いてくる。

首筋に当てられた少女の手に、レキはソツと被せるように自らの手を置いた。

「あつ」

ニースが小さな声を上げ、ビクツと体を震わせる。

「もう大丈夫だから、そんな辛そうな顔しないで？」

「いえ……ま、まだ血が完全に止まっていません……」

その声には甘く切ない響きが籠められていた。

傷口を押さえる少女の手は、レキの血で真つ赤に染まっている。

「少し皮が切れただけ、ちよつと大げさに血が出るけど、本当に大丈夫だから」

「で、ですが……」

レキはニースの手を優しく握ると、ゆつくりと傷口から離し、自らの胸に彼女の手を置く。服越しからでも判るほど少年の心臓は力強い鼓動を響かせ、生命力に溢れていた。

「ね、大丈夫でしょ？」

「……レキ……君」

レキの行為に、ニースは頬を赤く染める。

そして二人は、おもむろに血で濡れる指先を絡めあう。それは酷く淫らな行為を連想させた。濃厚な血の匂いの中、出会ったばかりだというのに、二人はまるで恋人のように熱く見つめあう。

ニースの方が背が高く、レキは熱いまなざしで少女を見上げた。

そんな視線を受た少女は、艶やかな桃色の唇から、何かを期待するかのよう甘い吐息が漏した。

「ニ、ニースさん……？」

少女の驚くほど甘い雰囲気、レキは息を飲んだ。少女はまるで発情期の雌犬のような有様に見えた。

レキは、女性経験が皆無で、異性に興味を持ったのも今回が初めてだ。

だが、少年の身に眠る戦いの『才能』は、一匹の雄としての秘めたる『力』は、まさに今この瞬間『目』を覚ました。

「レ、レキ君……？」

ニースもまた、生まれて初めて意識した異性に、胸のときめきを感じていた。

さらに眼つきの変わった少年に身の危険を覚えたが、体は甘く疼くばかりで一向に動こうとしない。

「……ボク、困ってるんです！」

剣士の中でも、短剣の類を愛用するナイフ使いであるレキは、基本的に無駄な攻撃はしない。

『殺す』と決めた時は、いつも必ず一撃で仕留めた。急所一撃、一撃必殺、まさにイチコロであった。

レキは、庇護欲をくすぐる愛らしいプリティーフフェイスに潤んだ瞳という『刃』で武装し、上目遣いでリースを見上げ、

「今日……泊まる所が無いんです」

甘い声で囁くようにそう言った。

それは本当に宿に困っての発言だったが、少年の目覚めた才能がそれを鋭く尖ったナイフに変えた。

「……つつつ！？」

母性本能に突き刺さるようなその一撃に、二ースの顔が真っ赤に染まる。

戦う術しか、殺す技しか、滅する力しか知らない、人の皮を被った『ひとでなし』は、まるで本当の乙女のようにうるたえた。

『戦乙女』は、若い男女が一つ屋根の下で『夜』を共にする意味を辛うじて察する事が出来た。

それは『契り』という行為で、『結合』という行為で、『雄と雌』という行為であった。

具体的な事は何も知らなかったが、それでも二ースは、それがエッチな事であると知っていた。

だからこそ、

「……へ、変な事しませんか？」

リースは耳まで真っ赤に染めて、恥ずかしそうに言葉を紡ぐ。

「へ、変な事」

知識は知らなくても、目覚めた雄としての本能が、自らの種を後世に残そうとする本能が、レキを不安にさせた。

なんとなく、この少女の巢に帰ったら、自分は酷い事をしてしま
う気がした。

良くは判らないけどそう思ったのだ。

そんな思考を振り払うように、視線を彷徨わせ　大きく突き出
たニースの胸へと行き着く。

レキは思わず喉を盛大に鳴らしてしまう。

し、しまった！

そう思い、慌てて目を逸らす。

だが、

時既に遅く。レキの思考の中は『アノ』衝撃的な感触で埋め尽く
される。まさに魔性のおっぱいであった。

「ッ！」

レキのある意味『負』の感情を、雄の視線を敏感に感じ取ったニ
ースは、一瞬驚いた顔をしたものの、色んな感情の入り混じった『
困った』表情を見せる。ただ、困ってはいても、そこには少しの嫌
悪感も存在していない。それどころか少女の瞳は、何かを期待する
ように揺れ動く。

そんな少女の甘い空気を読みきった少年は、ただ一言。

「……ダメ……かな？」

その言葉がトドメとなった。

ニースはもう何も語らず、ただ耳まで真っ赤にしてレキの手を引
いた。レキも黙したまま従う。

互いに顔を赤くし、裏路地を足早に歩む。その先に待つものを互
いに強く意識しながら

その時、異変が起きた。

前を歩くニースが、突然苦しそうに胸を押さえ、膝をつく。

「なッ！？　どうかしたの！　大丈夫！？」

「い、いえ！　何でも……何でもありませんッ！　んくう」

ニースはそう言うが、どうみても苦しそうだ。

だが、

「う、ごめんなさい……わ、私」

ニースは突然立ち上がると、その場で大きく跳躍した。

人とは信じられないほど高く、空に跳んだ少女は、少し離れた建物の屋上、その縁に降り立つ。

レキは慌てて声をかけようとした。

だが、金色の髪をたなびかせ月を背後に立つその姿は、とても幻想的で、少女の人とは思えないほどの美貌と相まって、まるで月の女神フィンメナの祝福を受けて戦う、戦女神ニースを描いた神話の壁画にそのものに見えた。

夢のようなそんな光景にレキは思わず見惚れ 獲物を捕らえる
絶好のチャンスをふいにした。

ニースは一度だけ、切ない表情でレキを振り返ると、そのまま闇夜に姿を消した。少女が去ったその場には不思議な香りが、まるで絞りたてのミルクのような甘い匂いだけが残った。

3節

3

次の日、とある宿屋の一室にレキは居た。

「もう、レキってば！ いつまで落ち込んでるの!？」

少し拗ねた響きがこもった愛らしい声の主は、少年の肩にちよこんと腰かける小人のように小さな少女だ。

それはアールブと呼ばれる精霊に近い妖精族の一種で、とても希少な存在だ。名前ティンク。レキの相棒を務めている。

光の粒子を放つ水色の髪に、銀色に輝く羽、手の平に収まるほど小さな少女の体には、綺麗な花のような短い丈のワンピース、腰の部分にある大きなリボンが特徴的だ。

「別に落ち込んでなんか……はあ……」

レキは、盛大にため息を吐く。

現在少年の思考の大部分を占領しているのは、昨晚出会った一人の少女だ。

まさに一目惚れだった。

ニースと名乗った少女の、凄まじい美貌に惹かれたのはあるが、なによりもレキを虜にしたのは少女の持つ計り知れない『力』だ。

もつと彼女と話したい。

だが肝心の少女は、名前以外の何も知らない状態だ。再びあの少女に出会えるのか？ そんな不安がレキの心に影を落とす。

この世は一期一会の出会いというものがある。

どんなに会いたいと思っても、運命の悪戯なのか、決して巡り合えない相手というのが確かに居るのだ。

レキは、チャンスを生かせない者の末路を嫌というほど見てきた。機会を逸するという事は、機会すら得られない者からしたら、それ

だけで罪深い行為なのだ。

「はあ……」

「ウソついても私には判るんだからね？ 私がちよくと目を離れたらスグに悪い女に引つかかるんだから！ これだからレキはぶんぶんっ！」

ティンクは、頬を膨らませて怒りを表現する。

怒ってる当人は兎も角として、それはとても愛らしい表情で、レキは思わず和んでしまう。

「なんでティンクってば、そんなに怒ってるの？ ほら、機嫌直してよ」

慣れた手つきで、ティンクの羽を優しく撫でる。

機嫌を損ねた相棒に最も効果的な一手である。

「な！？ べ、別に怒ってなんか！！ ただ母様からレキの事お願いねって頼まれてるからで、貴方の事なんて、なんとも思っていないだから！ か、勘違いしないでよね！」

ティンクは顔を赤くしてそっぽを向く。

そんな相棒に、レキは、

「ちゃんとわかってるって、だってティンクはアールプのお姫様だもんね。ボクだってこれでも感謝してるんだよ？」

レキは、気難しい相棒の、不器用な『慰め』に感謝しつつそう答えた。

肝心な部分を完璧に捉え違えてる少年。チャンスにすら気が付かないという罪深い者がここに居た。

「レキのバカ……鈍感……」

「何か言ったティンク？」

「な、何でも無いわよ！ それよりも早く用事を済ませちゃってよ。本当ならこんな人で一杯の街なんて来たくもなかったんだから……」
どうにも不機嫌なティンクに、レキは困った顔になる。

やっぱり大きな街には連れて来るんじゃないかな？

森で静かに暮らす妖精族であるティンクは、森を荒らす人族を快

く思っていない。どちらかというど嫌悪感を抱いている。

「付いてきてくれて、ありがとねティンク」

「べ、別に……レキの為なんかじゃ……」

「そうだ、お礼に何かご馳走するよ」

人間嫌いのティンクだが、妖精である生来の気質は変えられないらしく。にぎやかな街やお祭りなどが大好きで、甘く美味しいものにも目が無い。

使者としてこの都市を訪れたレキには、重要な使命があるのだが、相棒の機嫌を伺うというのもレキにとっては重要な使命であった。

それに、レキ本人がこの巨大な都市に到着した時点で、使命の内容はほぼ完遂したと言える状態なのだ。少しくらい寄り道をする余裕はあると判断した。

「本当ツ！？ で、でも……用事の方は良いの？」

「うん、ティンクには日頃からお世話になってるし」

「やったー！ 丁度行きたいお店があるの！」

ティンクは嬉しそうに羽をはためかせる。

なんだかんだ言っても、人族のお店をチェックをしている辺りに、彼女の妖精気質が窺えた。

そして、

「少し待ってて！ すぐ用意するから！」

慌ててバスルームへと飛び込むティンク。

しばらくして

「お待たせ！」

お出かけ準備万端のティンクが現れた。

それは手の平サイズの妖精姿とはまるで別人。アールブが『人』としての形態を取った状態のティンクがそこに居た。

レキは見慣れているのもう慣れたが、ティンクは絶世の美少女なのだ。

綺麗な水色の髪はそのままに、驚くほど長いまつ毛に、愛らしい瞳。誰もが羨む白い陶器のようにきめ細かな素肌。

美形が多い妖精族の中でも、アールブ随一と歌われた最強の美姫がそこには居た。

ティンクの衣装は、一言で例えるなら『花のつぼみ』だ。

春に芽吹いた新芽のように鮮やかな翠色のビスチエ。ハーフカットで切られたブラの部分は、ティンクの控えめなバストサイズを一番効果的に魅せるよう完璧に計算された出来栄え。

総じてスレンダーな体つきの多い妖精族は、逆にそれを最大の武器として魅せる技巧において、他の追隨を許さない。

大胆にお腹部分を露出させ、腰履きで穿かれているのは、同じ翠色のミニ丈のプリーツスカート。スカートの下には白色のパニエ。ふんわりと花のように広がるミニスカートから覗く細く長い脚は、スレンダーながらも女性的な丸みを感じさせる脚線美で、中性的なその肉体に確かな色気を加えていた。

「……どうかな？」

少しだけ頬を赤くして、上目遣いでレキを見つめるティンク。

「良く似合ってるよ。でも……ちよつと露出度が高くない？」

正直レキは目のやり場に困っていた。

幼馴染ともいえる間柄なので、あまり異性として意識しないが、最近のティンクは本当に可愛らしくなったと思う。

昔はただのお転婆姫だったのに……。

レキはそう思った。

「でも……レキってば、こういうのが好きなんですよ？」

ティンクはそう言って、ミニスカートの裾を掴んで持ち上げて見せた。

ふわっと広がったスカートの奥に、純白の三角地帯が一瞬みえ

「レキのえつち……」

してやったりという顔で、にんまりと笑みを浮かべるティンク。

悪戯好きの妖精の本領発揮であった。

レキはというど、

ポカッ

「い、いった〜い！ 何するのよバカレキ！」

「お姫様なんだから、そういうハシタナイ事しないの！」

「う〜……」

「ほら、バカな事してないで行くよ」

だがしかし、

「ねえレキ……何色だった？」

ティンクはレキの耳元で、ソツと囁くようにそう言った。

レキは反射的に顔を赤くしてしまう。

「あれあれ〜？ レキってば顔赤いよ？ もしかして私のパンツ見

て興奮しちゃったの？ クスクスツ、レキのえっち やっぱりこ

ういうの好きなんだ？」

色っぽい仕草で、両手で太ももの内側に手を当てるティンク。

まるで経験豊富な淑女の様子を見せた。

「……もうボク一人で行くからね」

レキは顔を赤くして、さっさと部屋から出て行ってしまった。

「私だって……恥ずかしいんだから……レキのバカバカ……」

一人部屋に残されたティンクは、レキが居なくなると同時に顔を真っ赤に染め、乙女の表情を見せる。

「早く治まって……」

胸の鼓動を抑えるために、一度大きく深呼吸する。

そして、

「こら、待ちなさいレキ〜！ ちゃんとお〜って貰うんだからね〜

〜！〜！」

元気な声を響かせてティンクはレキを追った。
僅かに頬の赤みを残したまま

4 節

4

「凄い、すごい！ 見て見てレキ！ こんなにおつきいなんて！」
「す、凄いね……これは……」

ハイテンションではしゃぐティンクと違い、レキは少し引き気味に『それ』を見つめた。

皿の上にそびえ立つ、それはまさに巨塔であった。

それはハニートーストという名のスイーツで、ミルクとバターをたっぷり使って練り上げた焼き立ての食パンまるごとをザックリと切り込みを入れ、そこに甘いハチミツをかける。そして新鮮なミルクで作ったバナライスをダブルで乗っけ、更にも上から生クリームやキャラメルソースをデコレーションした贅沢な一品。

「どうです旅の方、このお店の名物は？」

声をかけてきたのは、この喫茶店の看板娘。何故か『メイド服』に身を包んでいる彼女は、栗色の髪を三つ編みにした活発そうな美少女だ。

非常に短い丈のスカートに、黒いガータベルトがとても色っぽい

「……って、痛いよティンク！」

頬を膨らませえたティンクに、足をぎゅむーと踏まれるレキ。

「デレデレして……レキのえっち……やっぱり好きなんだ」

「……誤解だつてば！」

そうは言ったものの、昨晚ニースと出会ってからというもの、ティンクもそうだが短いスカートをはいた女性に、ついつい目がいつてしまう少年。これは一種のすり込みとも言える現象だ。惚れた相手が持つ性的魅力が、そのまま性的嗜好になるのは、良くある事柄だった。

現に今もレキは、対面に座るティンクの短いプリーツスカート、その暗黒のトライアングに、少しでも気を許せば引き寄せられそうになっていた。

ティンクもまた、たびたび感じるレキの視線を受けて羞恥を感じているが、決して隠そうとはしない。それどころかレキだけに見えやすいように角度を調節していた。

「ふふ、仲が良いんですね。ご注文の紅茶とミルクです。ごゆっくりどうぞ」

先ほどのメイド服の少女が、注文の品をテーブルに並べる。

「……なによそれ？」

ティンクがレキの注文のミルクを指差す。

「なにつて……牛乳だけど？」

「なんで、ジヨッキかって聞いているのよ！ お腹壊しても知らないんだからね？」

「い、良いでしょ別に……ボクだって男の子なんだから、もう少し背が伸びたいお年頃なんだよ」

レキは恥ずかしそうに顔を赤くして、ミルクをゴクゴクと飲む。

「なんだか不純な動機を感じるのは気のせいからしら？」

「そ、それよりも、出来立てなんだから早く食べよ」

その言葉にティンクは「それもそうね」と呟くと、ナイフとフォークで上品にハニートーストを切りわけ口へと運ぶ。

「あ、美味しい レキ、これ凄く美味しい」

「うん、本当に！」

二人は楽しそうに話しながら、ハニートーストという名の牙城を切り崩していった。

「ん〜 もう食べられない〜い」

満面の笑みを浮かべて、背伸びしながら街を歩くティンク。

「もう食べられないって、ボクに分まで食べといて良く言うよ」

後ろを追うように歩くレキは呆れた口調で言った。

「ふっふっくん、レキの物は私の物なんだから、何も問題無いでしょ？」

ティンクはクルツと反転して、後ろで手を組みながら、可憐な笑みを浮かべる。

それは妖精族ならではの動きで、言ってる内容は兎も角、とても綺麗だった。

「それにしても……大きな街ね。少し大きすぎない？ 街を歩くのに注意する事が人とぶつかる事だって……どれだけ居るのよ」

ティンクはあまりに多い人の波に圧倒されていた。彼女の故郷では考えられない事だった。

「そうだね。これほど大きな都市は、他に類を見ないだろうね。でもねティンク……ここは500年前に一度、完全にこの大地から消し飛んだんだよ」

「え？」

「神魔戦争って知ってるでしょ？」

「当たり前でしょ！ 私のお母様の母様が、その戦いを経験してるんだから！」

「その戦争の決戦の地が『ここ』なんだ。かつてイリスの聖地と歌われ、500年前の神魔戦争では『最後の砦』として『終末の魔獣』と戦った英雄達の眠る地なんだ」

レキは目を閉じ、幼い頃から聞かされた英雄譚を思い出す。

「想像も出来ないよね……今じゃ世界経済の中心地になってるんだから……。そだけじゃない、来るときに見た広大な緑林地帯や、大きな湖も、全て人の手で作られたものなんだよ」

「あんな綺麗な森と湖が……？ 人間って……ただ壊すだけじゃ無いんだ……」

ティンクは己の無知を恥じるような顔をした。

こういう所が、彼女の最大の美点だとレキは思っている。そして手のかかる妹を見守るような暖かな目でティンクを優しく見つめた。

すると、

「な、何よその目は！？ レ、レキの癖に生意気よ！」

ティンクは眉毛を吊り上げて怒る。

だがその頬は照れてるのが丸わかりなほど、真っ赤に染まっていた。

「人も、中々捨てたものじゃないでしょ？」

「ふん……だとしても、私が何を嫌おうが勝手でしょ？」

拗ねた顔でそっぽを向く。

「ボクは、ティンクに嫌われたままってのは、ちょっと残念かな」

「な、ななな、な！？」

レキの言葉に、ティンクは顔を真っ赤に染めて後ずさりする。

「どうかしたの？ 顔真っ赤だよ？」

「ッ！ な、何でもないわよ！ ったく……レキつてば、本当はわざとやってない？ それともさっきの仕返しかなにか？」

「む、心外だなあ。こんなにもティンクを心配してるってのに、君はアールプのお姫様で、ゆくゆくは国を動かす存在なんだから、もつと人族とも仲良くしないダメだぞ。まあ……急には難しいだろうからボクで馴れていけばいいよ」

「……こ、この……鈍感……あ、あんな言い方……誤解しちゃうじゃない」

ティンクは赤い顔のまま、拗ねたように唇をとがらせ、小さな声で呟いた。

そして、

「人族は嫌いだけど……レ、レレ、レキは特別なの！」

ティンクは思い切って、自らの思いを口に出した。これが今のティンクに出来る精一杯の告白だった。

だが、

「あ、あれ……レキ？」

さつきまで目の前に居たはずのレキが居ない。

「お〜い！ ティンク！ こっちこっち！」

見ればレキが、露店の前で手を振っていた。

ティンクは、悔しいような、ホッしたような、なんともいえない表情をしたが、すぐにレキの元へかけて行つた。

それはガラス工芸を販売している露店だった。

巧みな技で作られた装飾品や、調度品、食器類の数々に、レキとティンクは目を輝かせた。

「凄く綺麗……まるで宝石みたい」

「うん、それにこの動物なんて、今にも動き出しそうだよ」

そんな二人に、店の主である老婆が声をかけてきた。

「おや、旅の方かい？ よくぞイリスの聖地へこられたのう、アルビレオはそなた達を歓迎するよ」

「……ねえアルビレオって？」

小声でティンクが言う。

「この街の名前だよ。『希望の星』という願いが籠められるんだ」

「へえ、そうなんだ。素敵な名前ね」

「良かったら何か買ってあげるよ？」

ガラス工芸はアルビレオの名産品で、世界的に高い評価を得ている。

「ほんとー！ 嬉しい！ どれにしようかなあ……」

前かがみで、商品を見つめるティンク。とても真剣な表情だ。

でも、短いスカートはいてるんだから、そんな体勢になったら

み、見えてるよティンクってば……。

レキは、周りからガードするように、ティンクの背後へと立つ。

そして、

「これ！ これにするー！」

ティンクは三日月型のイヤリングを指差した。

「ほっほ……御目が高いねえ、それは……月の女神フィノメナを象徴した『月光のイヤリング』さ」

「月の女神って、神魔戦争で人類に味方した神々の一柱じゃない！」「確か……太陽の女神イリスのお姉さんだよな」

「そうだね。我らが女神。愛と戦いそして創造を司る太陽の女神イリス様の姉君にして、この世界を救った三貴神の石柱さ」

老婆は、年齢の深みを感じさせる声で静かにそう言った。

三貴神、それは神魔戦争の折、滅びかけたこの世界を救うために、一人の聖女の祈りに応じて、女神イリスと共に光臨した神々。

神罰と、調停、そして勝利を司る戦女神ニース。

魔獣の母、獣の王、そして闇を司る混沌の女神アイリ。

破壊と再生、そして生と死を司る月の女神フィノメナ。

その凄まじき力で、英雄たちと共にこの世界を救った三貴神は、現在では女神イリスに並ぶ圧倒的な信仰の対象になっている。

「その坊やは、何か買わないのかい？」

フードを目深にかぶり、表情は見えないが、何かを感じさせる重みを感じた。

そして、ふと目に止まったのは一つのペンダント。

透明色の球体の中に、まるで太陽をつめたかのように金色に輝くペンダント。陽光の反射を受けて一際輝いて見える。

「これを……」

レキは無意識にそれを指差していた。

「ほっほほ……これまた御目が高いねえ……。それはまさに、太陽の女神イリス様、その威光を表現したこの世に二つと無い傑作さ。銘は『太陽神の瞳』だよ」

「お幾らになりますか？」

レキはそう尋ねた。

だが、

「そうさねえ……今はまだ……と言っておこうかね」

「え？」

「差し上げると言っておるのじゃ。なに、心配せんでもガラスで作った安物さ。旅の方への贈り物といった所じゃな。土産物を買ったいは是非ともまた寄っておくれ」

老婆は楽しそうに笑いながらそう言った。

なるほど、そういう意味か。

この老婆は、長年露店をやっている眼力なのか、レキ達がアルビレオを訪れたばかりだと判ったようだ。

そして、用事を済ませて帰る時には、また寄って土産物として沢山買ってこれれば良い。つまり、食べ物を買っている露店が良くやっている味見と同じだ。レキはそう解釈した。

「ありがとうございます。帰りには必ず寄りますから」

「おばあさん、またね！」

「そうかい、そうかい。そりゃ……楽しみにしておるよ」

最後まで老婆の表情は、フードに隠れて見えなかった。

「ふふ、見て見てレキ、似合うかな？」

ガラス工芸の露店から離れたら、さっそくティンクは耳にイヤリングを付けて見せた。

綺麗な光沢を放つそれは、太陽の光を反射して、まるで本物の月光を放つるようにも見えた。これがガラスで作られたとは信じられない思いだ。

「うん、とても良く似合ってる」

「うふ、ありがとレキ」

ティンクは上機嫌にステップを踏みながら歩く。だが突然立ち止まると、

「な、なによ……これ……」

ティンクの尋常ではない態度にレキは、彼女の駆け寄った。

「どうかしたの!？」

「レ、レキ……これ……魔道具だよ」

ティンクは耳に付けたピアスに、恐る恐る触れた。

「なんだって!？」

「神意の量が凄い上がってるのが判るの……こんなに強力な魔力強化の付加魔術が付けられた魔道具なんて、国宝級だよ!」

「まさか……それじゃこれも」

レキは胸ポケットから、ペンダントを取り出した。

さつきまではガラス球の気配しか感じなかったのに、今手にあるそれからは、まるで太陽のように圧倒的な生命力が溢れている。

「レ、レキ! それ……凄いつてレベルじゃないほどの生命強化の付加魔術が籠められてるよ!」

ティンクはとても優秀な魔術師だ。

彼女がそう断言するならば、間違いは無いだろう。

レキはティンクの手を掴むと、

「おばあさんの所に帰ろう」

「う、うん!」

二人は足早に、来た道を戻る。

だが、

「いらつしゃい! いらつしゃい! 何にしますか!」

老婆が居たはずの露店は、全く別のお店に変わっていた。

「あ、あの……さつきまでココでガラス工芸売っていた、おばあさん知りませんか?」

「何言つてんだいお客さん! うちの10年間ここで露天商やってるんだぜ?」

店の主人は、怪訝な顔でそう言うと、訪れた他の客を相手に商売を始めた。

「レキ……探索の魔術にも引つかからないよ!」

「ティンク……気配を巡らせるから……衝撃に備えて」

「わ、わかった」

ティンクは慌ててレキから距離を取る。

レキは右太ももにある短剣を引き抜くと、地面へと突き刺した。

そして、

「きゃ!?!」「な、なんだ!」「ビリッて来た!」「突風でも吹いたのか?」

突然の衝撃に、人で賑わう市場は騒然となった。

こうなると予想していたので緊急時以外は、出来るだけ使いたくない技だが、今はまさにその緊急事態だった。

「どうだった……?」

「ダメ……見つからない。ただ……『この都市』には、もう居ないのだけは確かだよ」

まるで夢のように現実味に欠け、狸や狐に化かされてる思いだったが、二人の手元には国宝級の魔道具だけが確かに残されていた。

「……………」

そして、レキはとある方向をジッと見つめ、頬を赤く染めた。

気配を巡らせた時に、もう一人……別の探し人を見つけてしまった。

そう……見つけてしまったのだ。

「レキ……君?」

市場で賑わう通りのずっと先、人の目では目視出来ないほどの離れた距離、そこにレキの一目惚れの相手が、ニースが居た。

彼女もまた、レキの存在を敏感に感じ取っていた。

運命の歯車がゆっくりと動き出す。

それは誰にも止める事が出来ず。巻き込まれる者は、ただそれが

運命だと思っしかない。

ただ……運命を切り開く者が居るとするならば、それはきっと他人への迷惑なぞ露とも思わぬ馬鹿だけなのだろう。

ここにも一人……そんな馬鹿者が居た。

4節（後書き）

世界観が見えて来たでしょうか？
胸焼けするように甘い物語を予定しております。

5 節

5

レキは走る。

ただひたすらに走る。

上体を出来る限り低く保ちながら、地面と平行になるように大地を蹴る。速度は殺さないまま体の上下振動を抑え、両腕の力を抜く。自然と腕は背後へと流れた。

それは相手からこちらの武器が見えないように、すれ違いざまに即殺せるように、覆って、隠して、闇へと葬る為の歩法。

それこそが少年が出来る最速の歩法。『神行法』と呼ばれる戦闘用移動術。

茶褐色の外套をたなびかせ、人垣かき分け、レキは走って、走って、走って

「突然立ち止まって、どうかしたのかいニース？」

そう言ったのは眉目秀麗な顔立ちの男。最高級の騎士鎧を着こなして、鎧の上からでも判るほど鍛え抜かれた体。腰に差された長剣は、それが飾りではない事を如実に物語っている。

「……………」

男の質問にニースは全く応じず、ただ熱い眼差しであさつての方向を見つめた。

その様子はまるで恋する乙女のそれで、騎士の男は驚いた顔になる。

「いったいどうしたと」

そんな騎士の男の言葉をニースが遮った。

「…………… たった今急用が出来ました。申し訳ありませんが、ここで失

礼します」

言葉こそ丁寧だが、もはやニースの瞳には、目の前に居るはずの男の姿は欠片ほども映っていない。

今もあさつての方向を熱い眼差しで見つめていた。

男も釣られてそちらへと目を向ける。

そして、

「下がりなさいニース！」

騎士の男はそう叫ぶと、腰の剣を引き抜き、ニースを庇う様に向へと立つ。

男の目に映る物、それはまさに『漆黒の狼』だった。

それは信じられない速度でこちらへと迫る。

「ツツアア！」

刺客だと判断した騎士の男は、裂帛の気合と共に、なぎ払うように剣を振るった。

だが漆黒の狼は驚くべき事に、長剣の『下』をかいくぐりると、前転して一瞬の内に男の懐へと入る。男は自らの間合いをあっさりと破られて蒼然となるが、くぐった修羅場の数が男の体を動かしていた。男は手の中で剣を反転させると、逆手に持ち替え懐に入り込んだ敵を串刺しにする為に振り下ろす。漆黒の狼は右手に持つ短剣を構えるが、男の剣速の方が速い。

男は勝利を確信した。

その瞬間、

焼け付くような鋭い痛みを右腕に感じて、思わず剣を落としてしまふ。

男の剣を持つ右腕、その二の腕部分にナイフが下から突き刺さっていた。

「……見事だ」

右手の短剣は囷で、死角に隠した左手のナイフで利き腕を殺された。

それは一瞬の攻防であったが、勝敗は誰が見ても明白だった。

「それほどの腕を持ちながら……残念でならないよ」

男は自らの命が絶たれる覚悟をした。

だが驚く事に、漆黒の狼は後ろへ飛び退くと何故かニースを守るように刃を構える。

そして、

「レキ君っ!!」

背後からニースに抱きしめられる漆黒の狼 少年という事実にも

男は更に驚く。

恐るべき刺客は、まるで少女のように愛らしい顔の男の子だった。

「レキ君だ。本当にレキ君だった!」

「ちょ、二、ニースさん、まって……今は、むぎゅー」

ニースにギューと抱きしめられ、半ば抱っこされた状態の少年は顔を真っ赤にして叫ぶ。

「レキ君、怪我とかしてませんか? 痛い所とかありませんか?」

「だ、大丈夫です。その、しいていうなら……周りの目が痛いかも

……」

まるで『ぬいぐるみ』のように抱きかかえられた少年に、周囲を歩く人々は生暖かい目を送っている。

「敵では無いのか……? なんにせよ……騒ぎにならずにすんだな」

先ほどの戦いは、あまりに一瞬の出来事で、誰も気が付いていないようだ。

男は剣を回収し鞘へと納めると、真っ赤な顔でデイベア扱いられてる少年と、見た事もないような満面の笑みで少年を抱きしめるニースを眺め、

「……すまないが……どういう事なのか説明してくれるかな?」

酷く痛む腕を止血しながら、疲れたようなため息を吐いた。

「ほお、それでは昨晚ニースを救ってくれた英雄殿とは君の事だったのか？ おっと失礼した。私の名はロンド。ロンド・ザ・アイアンシールド。鉄壁の称号を持つ。盾騎士だ」

盾騎士と聞いてレキは「あれ？」という表情を浮べた。それを見たロンドは、

「今日は非番だね、あいにく盾の持ち合わせがなかったのさ」
片目を閉じてそう言った。

「そうだったんですか……」

「私の本領は『盾』の扱いだからね。良ければ君の名前も教えてはくれないか？」

「あ、ごめんなさい。ボクの名は……えっと……レキ。レキって言います」

「ふむ……」

盾騎士ロンドは、何かを探るような目でレキを見つめたが、ふとニースに目を向けると、

「レキ君の事は判ったが、君達はいつの間になんか仲良くなったんだい？」

ロンドは、含みのある様な笑みでそう言った

「えっと……」

「プライベートな内容は答える義務は無いかい？ でも、私には聞く権利があるのさ。何故なら私は」

「ロンドッ！」

ロンドの意図を察したニースは、顔色を変えて怒鳴る。

だがロンドは彼女を無視して言葉を続ける。

「私はニースの婚約者なのさ」

「え……」

その言葉を聞いた瞬間、レキは頭の中が真っ白になった。遅れて
込上げて来るのは胃がムカムカするような得体の知れない感情。

「ち、違っのレキ君！ ロンド！ 今の言葉……すぐに訂正して下
さい！」

「断ると言ったら？」

「絶対に 許しません」

リースは顔の表情を消すと、槍の先端をロンドへ向ける。

「味方に刃を向けるとはな。騎士にあるまじき行為だぞ……二ース
「虚偽の罪を犯した同僚を悪の道から救い出すのも騎士の務めです。
それに……騎士道は私と共にあります。どうあるかは私が決めます」
二ースから、湯気が立ち上るように、ゆっくりと殺気があふれ出
ていく。

そこへ、

「ロンドさん……」

割って入ったのはレキだった。

ゆっくりとした歩みで、一歩づつロンドへと歩み寄る。

その時ロンドが感じたのは、『万軍』に囲まれたかのような圧倒
的なプレッシャー、信じられない重圧だった。

それは戦場に立った経験があるからこそ判る感覚。『絶望』とい
う名の生々しい死の感覚だった。

二ースも驚いた顔でレキを見つめる。

「ボクは」

「わ、わかった。もう良いレキ君！」

「いいえ、良くなつて無いです！ 例え貴方がリースの婚約者だと
しても」

「冗談だよレキ君。私が悪かった！ 悪ふざけが過ぎた！ いやあ、
やられた右腕の仕返しのもりだったけど予想以上に二人共初々し

くてねえ、つい調子に乗ってしまったよ。はっはは
「 ロンドの乾いた笑みが虚しく木霊する。

「……ねえ、ニースさん」

「なんですかレキ君」

「やつちやつても良いのかな？ この人」

「ええ、勿論です」

天使のような笑みを浮べてニースは言った。

「皆して酷い扱いだな。それよりレキ君」

冷や汗を浮べながら、ロンドはレキの名を呼んだ。

「なんです？」

「嫉妬は……最高のスパイスだったろう？」

「っ！」

レキは顔を真っ赤に染めた。

「まったく……レキ君は、見てて飽きないな」

そこにニースが、

「……嫉妬とはなんです？」

可愛らしく首をかしげて言った。

ロンドは「あちゃー」と額に手を当て天を仰ぐ。

「やれやれ、騎士姫殿下にも、いずれ判りますよ。こういうのは百聞は一見に如かずと言いましたね。経験しないと判らんもんです。

なあ少年」

ロンドは馴れ馴れしくレキの肩に手を回した。

「……し、知りませんよ、もう」

「だってほら、あちらの彼女はレキ君の連れなんだろう？」

ロンドが目線を向けた、その先には

「ニースらあああー！！ れきいいいいー！！」

怒り心頭のティンクが、おっかなびっくり人込みを掻き分けてこちらへと近づいてきていた。

し、しまった。テインクの事すっかり忘れてた。

そんなレキを横目にロンドは、

「あれは……墓守りの一族……となるとやはり……」

何かを確信したような目でレキを見つめた。

彼の手が震えている事に、その場に居る者は誰も気が付かなかった。

5 節（後書き）

こんばんわスタジオぽこたんです。

一人称は、心の心情を描くのが凄い便利でしたが、大勢が動く場面がとても難しかったです。

三人称は、その反対って感じ。

さっそくお気に入り登録や、感想くれた方、ありがとうございます。
今度ともよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8324x/>

わんわんお！

2011年10月26日03時01分発行